

工房だより

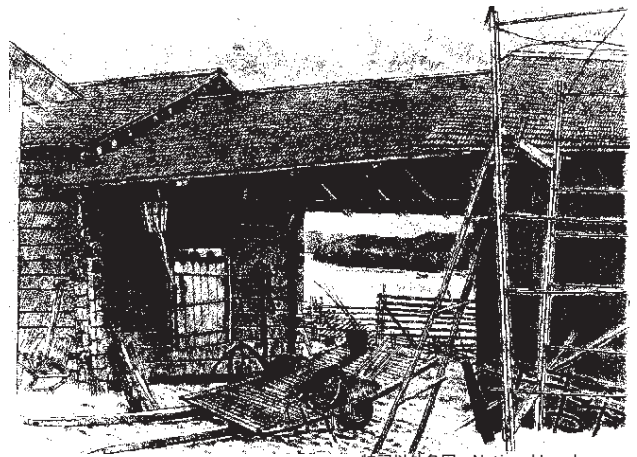
古山恵一郎

「偉い人」はアジアの迷惑

韓国人にとって「イ・パクサ」といえば李承晩元大統領であるが、日本と同様、中国大陸12億人の市場に魅力を感じるAPEC諸国で、台湾の李登輝さんは中華民国総統とは呼ばれず、「台湾から来た李博士」と呼ばれているようだ。第二次世界大戦後、台湾で日本に代って政権に付いたのは亡命政権ともいえる中華民国政府だった。長期戒厳令の記録保持者である、大半の住民にとってヨソモノともいえる政府は「災難」と言ってもよく、人々は「官災」をなるべく避けながら暮らすという知恵を身に付けた。官の統制に属さない自由経済は人々に幸せをもたらすが、「偉い人」は大衆にとっては迷惑以外の何者でもない、というふうに台湾の社会は成り立っているようだ。同じ時期、北京では半世紀に渡って「だれが偉いか」「だれが偉いか」という頭の取り合いが12億人の生活を振り回した。台湾と比較して見ても中国の近代化にとって最大の障害はこの「偉い較べ」だったと言ってもよいだろう。韓国の郵便局で、彼の国の「官員さん」は近代的な職能で成り立っているのではなく「身分」なのだ、と感じたことがあったが、台湾の国有鉄道でもやはり同じことを感じた。鉄道に限らず、公営企業の従業員は近代経営とはかけ離れた身分保証の世界に住んでいるようなのだ。「官員さん」の身分保証のためには税金から赤字補填をするのは当然である。何ととっても公益事業ではないか。

「官員さん」は何かしてくれるから「偉い」のではなく、官員さんだから「偉い」のである。立法だの行政だのといったことは、大衆にとっては迷惑そのものであり、「偉い人」にまかせて置けば良い。それよりも「発財」に精を出すのがまともな人間のやることだ。というわけで台湾の人は「小さな政府」が好きなようだ。台湾海峡を挟んで半世紀に渡って続けられている中華人民共和国と中華民国の面子争いも煎じ詰めれば「だれが偉いか」「だれが偉いか」と言うことに尽きるようで、「北京に行けば副首席の地位で厚遇してくれるだろうから私は行かない。」と李登輝さんは言っている。ソビエト連邦の崩壊も何となくイデオロギーの崩壊というより官僚が食いつぶしてしまった、という印象があるのだが、何せ中国半万年である。「〇〇主義」だとか「△△主義」などというものは歴史をひもとけばいずれもその昔中国にあったものばかりだ、というのが台湾を訪れて触れて見た中国文化の印象だった。共産主義というも「だれが偉いか」という頭の取り合いに利用価値のあるお題目、という面があるのを否定できないだろう。幕末の遣米使節団がワシントンで米国の首脳と雑談の折り、リンカーン大統領が偉大だということに話が及び、「ところでご子息は今、何をされていますか。」と尋ねたところ、同席していた米国側の誰も知らなかったことを、使節の随員は軽蔑に満ちた筆で書き留めている。先祖・家柄によらず「自ら」に「由る」というのが欧米で誕生した近代的個人と言うシロモノなのだが、アジアの地では今だにそうした欧米型の近代が社会の根幹をなすに至っていない。李登輝さんが癌で一人きりの子息を無くされていることが、「野心が無い」ことの証明になっているのは残念だが、逆の例もすぐ近隣の国に現存している。

科挙は「だれが偉いか」を先祖・家柄によらず、



特記以外各図：National Landscapes
Ministry of The Environment Finland, 1993

個人の能力にゆだねる優れたシステムではあったが、所詮は身分社会の時代の産物であり、「偉い人」を社会への貢献度で計るのでなく、試験によってランク付けされた身分によって認定するところまでの働きしかなかった。相変わらず東アジアの広い範囲では台湾の大衆が見るように、「偉い人」は大衆にとっては迷惑以外の何者でもないのだ。

シアトルのある大学の構内で、いかにも教官らしい同年配の紳士が、急ぎ脚で歩行者信号を無視して横断歩道を渡ろうとし、自転車に乗った学生に怒られているところを見たことがあるが、学生も教官という身分ではなく信号無視の歩行者として怒り、怒られたほうも学生に素直に誤っているところを見ると、なるほどここは身分の無い国なのだ実感した。我が国における江戸時代の朱子学の習得法など見ると、なるほど我が国は半万年の中国文明に隣接してキャッチアップしかできない体質なのだ、現在の先端技術開発も少しも変わっていないと感じるが、それと同様、「偉い人」は科学技術の進歩にとっては迷惑以外の何者でもないのだ。「偉い人」にはなりたくない。

☆こやまけい ちろう / ASK Inc. / 浜松

永田温子

はじまりの山羊ネット

紅茶中毒の私は、山羊乳入りの紅茶を朝一番にたっぷり飲んでから、山羊小屋へ向かいます。熱いお湯の中にタオル、ステンレスの寸胴、首にてぬぐいといういでたちで、まず、Bebeが大好きなとうもろこしの入った飼料を一杯すくって来て、呼び出して一段高い台に乗ってもらい、四角い穴から長い角付きの頭を出す格好で首のところをセットし、両後足を赤いハチマキで固定し、寸胴をお腹の下に置いて、真後から、時折しっぽに額が触れたりしながら、おっぱいをしぼり始めるのです。この四角い穴の向方側に搾乳時用の餌箱があります。これらを手早くするというのが、現在の私が獲得した”技”です。出産後2カ月のBebeも、たまたまおっぱいをしぼられることに慣らされてきたというのが救いです。しぼり始めたころ、つまり1カ月前は、おざなりにおっぱいに蒸したタオルを当てた後、やたら押ししたり引っ張ったりして早く早くとあせってばかりで、大抵抗に会いました。子供にやるはずのおっぱいをとられることへの抗議の気持ちがなんといっても大きかったですよ。

何事もゆっくり落ち着いてと少しは余裕のある今は、初めバレーボールの乳房が、やがて軟式テニスのボールのような感触になっていくまで、クツクツクツ、ジャツジャツとしぼれてしまいます。よくしたもので、Bebeは搾乳前か後におしっこをしてくれますし、途中うんちが出る場合も、ムートとお尻を突き出して、しっぽをパッと上げるので、私には頭をバックさせるだけのゆとりがあって、ちっとも大変ではないのです。

我が家では子山羊が5月6日夜に生まれました。お隣の清水家では5月1日に1頭(めめ)、銭函の奥村家では5月8日に雌2頭(名前は付けない)と続けての誕生でした。Bebeは初産なのに3頭も生んでしまい、疲れ果てたのかその後体調を崩して、周囲のみんなに心配をかけてしまいました。この時一番がっかりしていたのは私だっただと思っています。子山羊をもらってから2年近く待ったのに、おっぱいがしぼれないかもしれないなんて・・・と、希望を100%捨てたわけではありませんでした。心底落胆していたのです。この産後の1週間余りには沢山のこまやかな思いと行動、周りからの溢れる”愛”が詰め込まれています。あんなこと、こんなことの中には、銭函からメリーの初乳1ℓをびんに詰めて、リンゴと一緒に駆けつけてくれた奥村夫人(メリーはBebeのお母さん)、“ちゃめ”のあいているはずの片方の乳房をBebeの子供にどうかしら?と、里子のアイディアを出してくれた清水さん(ちゃめはBebeの姉妹)、街の普通の獣医さんと少し違って、薬のほかにも、もち米だんごやバナナのハチミツあえなどをすすめてくれた獣医さん、ケトシスという病気について遠くから電話で教えてくれたつくねさん、電気ごたつを上をぶら下げたりなどして暖房対策を担当した勝之、芽の出始めたばかりのあらゆる草類を刈り取って集めた毎日・・・等、Bebeが山を越して、これでもう安心と思えるまでの落ち着かぬ日々は、10日間足らずでした。その後、3頭のうちの”きみちゃん”はずっとBebeのおっぱいを飲み続け、あとの”はにまる”と”みはる”は、人工乳に切り替えて、もうそろそろ3頭とも離乳の準備です。重そうなおっぱいをプラプラさせながら、3頭の子山羊を従えて、風のように山を降りるBebe!この4頭の美しい集団に、すぐ近くを走る車もスピードをゆるめています。羊もしばらくは舞台の中心をすっかり山羊に譲った形です。そうそう、この子供たちのお父さんの持ち主、新十津川の阿部さんにも、なかなか飲んでくれない人工乳のやり方に苦労していたころ、「がんばりなさい」と励ましていただきました。

毎朝1ℓ余りの山羊乳を週の前半はBonチーズに

加工しています。BはBebeのB、onはアトリエオンのon、山羊乳先進地域の言葉でもあるフランス語に敬意を表して、bon(bonne) = goodにもかけたつもりです。平凡のぼんというのも重なり合います。

ところでBonチーズってどんなの？と問われれば、要するに我が家が数年間食べ続けてきた牛乳ヨーグルトを、山羊乳製に替えて、それにわずかの羊のレンネットを加えて、カードを作り、数日間寝かせるというワンパターンの簡単なチーズです。できたては山羊が食べた草の香りを楽しめますが、何日間かでも置くと、不思議に別の独特の風味と舌ざわりが育ってきて、「おいしい！」のです。この香りやきめをさまざまに変えていく条件や手だてが取り寄せた本には載っていますが、要するに牛乳ほどにはアレンジ技術を駆使しないのが山羊チーズではないかと、今の私は理解しています。カードをさまざまにカットし分けたり、ホエーの抜き方が多種多様だったりしないらしいのです。こんな少しの体験で大胆に言わせていただければ、山羊チーズの方が自然の環境条件（熟成の環境も含めて）が決め手になる、そのことに賭けられるという意味において、作り手にはシンプルで取っ付き易いチーズなのではないでしょうか。もっとも、織物の世界で、平織に始まって平織に終わると言われているのと同じような傾向がきっとあるのでしょう。チーズ大好き人間と、ああでもない、こうでもないのにぎやかに仕上げているチーズ。今のところ、ボン・チーズは成形してから2週間ほどの歴史しかまだ持っていないということ、その新鮮さが魅力ですので、トンネルにいらした方しか味見できていません。どうぞ！

☆ながたはるこ／小別沢・山羊²くらぶ／札幌

片桐つくね

街でひつじと暮らすには・5

とうとう羊の海綿状脳症、スクレイピーを出してしまった。「法定伝染病」はカンタンに言うと獣医師が「決定」下さなければ発生しない。今回これっぽっちの病気で、農林水産省からして挙って大騒ぎし、カメラや「正義のペン」が飼い主を追い回し、士別市を汚れの街のように取り上げているようでは、もう日本では2度とこの病気は発生しないだろう。例えば農家のヒトがこっそり病気の

動物を埋めてしまったり、獣医師が「超法律的」診断をして病気をなかったことにすれば「法定伝染病のスクレイピー」の発生は、ない、わけ。ヒトの命に関わるような病気ならいざ知らず、ヒトにはうつらない、動物の間で急速に伝染するわけでも大量に死亡するわけでもない病気で、かつきちんと防疫さえすれば継続発生がなくなるようなものを、記者会見までして...病気無くして農家も亡くす...というのは畜産にかかわっている人間がやることではない（あれ？農林水産省って、畜産に関わってなかったっけ？）。羊のスクレイピーはヒトには伝染しない。日本の羊のスクレイピーが日本の牛に伝染することはない（英国の牛たちは羊のスクレイピー及び牛の伝染性海綿状脳症の病原体が含まれた蛋白飼料を全摂取蛋白質の10%以上、6年間食べ続けて発症したのだ。そして、危険な飼料の使用を禁止された後も、倉庫に残っていたこれらを経済的理由=もったいないから牛に与え続けたのが発生増加の原因だ→薬害エイズにホントに似てる。それだけの数の羊は日本にはいない。そして、日本の動物性蛋白質作成過程は、かつての英国みたいにせこくない。十分熱をかけています。※現在、羊由来の動物性蛋白質が羊を含めた他の動物の口に入ることはない）。

でも、牛の海綿状脳症はヒトに伝染するかもしれない。病原体が含まれた羊や牛を、大量に、牛に、共食いさせた、ために作り出された「ヒトが作ってしまった病気」だから。病原体が、羊のスクレイピーの病原体とは同一ではなく、異なる性質を持つものになってしまったから。そろそろ、羊虐めや、英国叩きを止めてこの辺のことしっかり考えた方がいいんじゃないの？それから、士別市のこと。今回のスクレイピーは、市外から買われてきた妊娠羊から生まれた子羊が成羊になったとき発症したものだ。この羊は市内の牧場に放牧されたこともない。士別市の羊に関係なく「たまたまその羊がいた」だけなのだ。それなのに士別市から購入した種雄羊を突き返すとか、市内で売られているお菓子、「サフォーク最中（もちろん原料はもち米、小豆、砂糖）を食べても大丈夫か？」とか。ほんとにもう!!!スクレイピーは、英国、アイルランド、アメリカ、カナダ、フランス等々、ニュージーランドとオーストラリア以外全世界で毎年発生しています。こうゆうヒト達はフランス料理のデザートチーズを食べてはいけない。とても美味しい羊乳のチーズは、最中とおんなじぐらいケンだよ。

☆かたぎりつくね／獣医師／旭川
なかなか街でひつじと暮らせない...

田中素／かけだしのかけだし 信州で思うこと

間口7～8間の田字型平面に緩い勾配で掛かる切妻の大屋根、しっくい塗の白壁と黒くて太い柱・梁、信州の伝統的な本棟造りの民家です。高く青く連なる山々を背景にすっきりと風格があります。民家の再生をメインとした松本の設計事務所で、私の初社会人生活はスタートしました。事務所の建物も昭和初期に建てられた疑似洋風の病院を再生したものです。1階は洋風で天井は3m以上あり、照明や中心飾り、玄関のステンドグラス等が当時の雰囲気を与えています。2階は病室が数室と畳敷きの大広間になっていて夜はかなりコワイけれど、使い込まれた建物は何となく居心地がいいものです（残業が多いのはそのせいでしょうか?）。

描かせてもらう図面の種類も増えてきて、1/20～1/50位の縮尺の図面は細かいところまで描き込むので、いろいろな発見が多く楽しいです。「お勤め」にも慣れてきて落ち着いてものを見る余裕もほんの少し出てきました。

現地調査にちょっと田舎の民家を測量に行くと、太い大黒柱があったり、式台や寄付、オエ等の聞き慣れない間があって長い時代を経てきた家なんだと実感します。普通の住空間よりも客を迎える部分を中心にした間取りは昔の人の考えが現われています。その心を受け継ぐ意味でも私の事務所の「再生」は、そのような座敷、オエ等は特に材や間取りをなるべく残すように計画することが多いようです。新しいもので溢れる現代において、昔からの家を「残そう」という気持ちを持つことも「残したい」と思わせる家であることも、簡単なことではありません。これからどれだけ「いいもの」に関わっていけるか期待半分不安半分です。

まちの中はというと、城下町なので入り組んだ細い道が通っています。こまごまと並ぶ店をのぞいたり、あちこちに湧き出ている水に触れてみたりと、歩くのにちょうどよい具合の尺度でまちなみが出来ています。しかし、当然のことながら自動車での移動は大変不便です。そこで今、路地傍を流れる水路にフタをし、古い建物を壊して広くて真直ぐな道を整備する計画が着々と進められています。北海道というあまり古い建物やまちなみの残されていないところで育った私にとって、「歴史がある」ものは、とても羨ましく感じます。そんなこともあって「再開発」で消えてゆくものが本当に、その場所で長いことかけてつくってきた時を断ち切ってまで消える必要があるものなのか、

皆でもっとよく考えられたらと思います。
とりあえず、初梅雨に備えて湿気取り3コパックを押し入に配備し、カバンにタオルをつめ込み、空模様を無視して自転車で移動の毎日です。
☆たなかもと / 降幡建築設計事務所 / 長野県松本市

蔦井乃理子うつわ展

7月16日(火)～21日(日)

青楓舎

札幌市中央区南2条西24丁目 ☎ 011-612-9190

北尾久美子

隣んちの鳥日記 パート4

薄黄緑の若葉が日に日に色を深め、いつの間にかあたりを覆いつくし、フキノトウは大きなクッションサイズの葉になり、オオハナウドもサワアザミも背丈ほどにのびてしまった。見え隠れしていた



ヒヨドリ：全身灰色の中型の鳥、ヒヨドリは高い声でなく、KITAO KUMIKO

鳥たちは、緑のカーテンの向こう側にいってしまい、めっきり姿を見せなくなりました。鳴き声は朝早くと夕方には聞こえるが、日中は、ハルゼミの声でかき消されてしまう。そう。夏はやっぱり虫たちの季節なのです。わが家にも、窓を開けると、あまり有り難くないお客がたくさんやって来る。すみずみを行進するアリ、迷い込んでパニックになっているマルハナバチ、しましま吸血鬼、名も知らぬ無数の羽虫たち……いちいち悲鳴をあげていられないから、だんだん慣れて平気でつまんで外に出せるようになった。ただし、偵察に来たスズメバチは別。持久戦でひたすら相手が、出ていってくれることを願うが、これがなかなか要領が悪く、出口を見つけられずに、開いていない天窗に突進し、うなり続ける。聞いている方もだんだんあせって来る。しょうがない、シビレを切らしてハエたたきで一発勝負となる。こっちだって恐いからちょっと命がけ。

ある朝、窓辺でパンをかじっていると、目の前の枝先に、ヒヨドリがこっちを向いて止まっていた。窓を開けても逃げない。目が合ってしまった。”パン食べる？”ひとつまみちぎってほおると、ひらりと地面におりてパンを見つけ出した。冬の間、えさ台にせっせとパンとリンゴを置いていたのが私だと覚えていたのかな？それ以来、時々やって来ては、甘えたように羽を振るわせ、あのかん高い声でピーヨピーヨと催促するようになった。何をしても、その声を聞きつけると、”あっ、ヒヨちゃん。ちょっと待ってて～”なんて甘い声を出していそいそとパンやリンゴを用意する。ポーンと放ると”フライングキャッチ”。さすがうまい！！見ていた相棒は”それってハトの餌やりのオバサンじゃないの”なんて嫌みをいっていたが、どうやら私の留守にこっそり自分でもフライングキャッチを楽しんでいるらしい。日に何度かやって来ていたヒヨドリも、彼女？を連れて立ち寄ってから（ヒヨドリはオス・メスが同色で区別がつかない）、だんだん来なくなりました。ちょっと淋しいけど、まあいいか。虫の方が栄養いっぱいあるしね。緑の向こう側の鳥たちは無数に飛びかう虫を食べ、子育てに夢中の頃だ。もうすぐ、木の葉の間から巣立ちしたばかりのボヤボヤの羽毛に会えるかも知れない。

(追：先日手に入れたワープロでやっこのことまでたどりついた。うーん、いつの日か、ピアニストみたいに両指を自在に使って、打ってみたい。あーあ、肩こった……)

☆きたおくみこ／バードカービング作家
スタジオ ZERO 主宰／札幌

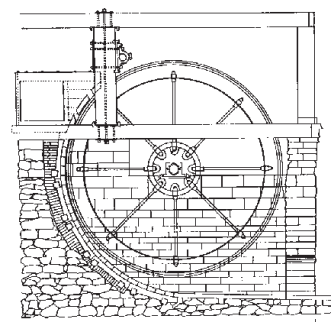
松本 茂

私の「ラ・マルセイエーズ」

毎年のことですが、7月は心たかまる良い月です。4日のアメリカ独立記念日、14日のフランス革命記念日。7月は革命の月なのでしょうか。今年は、独立宣言から220年、バスチーユからは207年になります。私は梅雨時の鬱陶しい季節になると、「ラ・マルセイエーズ」をBGMにして朝食をとることにしています。元気が出てとても良いものです。昨年はこの歌がフランスの国歌に制定されてから、ちょうど200年とかいうことで、吉田進という人の編集でCDが出ています。(吉田さんは、中公新書で「ラ・マルセイエーズ物語」も書いています。)アトランタのオリンピックでは、国の旗と歌を背負った競争が世界中に報道されるので、この「旗と歌」自身もコンペティションの中に晒されます。KIMIGAYOを聞かされることは少なそうなので結構ですが、この「ラ・マルセイエーズ」もめったに聞こえてこないことでしょう。

ところで「ラ・マルセイエーズ」は、これまでも大きな政治変動の度に、国歌の地位を追われています。ナポレオン帝政から王政復古、第2帝政終焉までの長い間、革命派の歌として投獄されていました。第3共和政以後も、反動期には追放されています。現在でも、体制側の世界では敬遠されがちな歌です。アルペールビルの冬季オリンピックでは、過激な歌詞の部分は「国際的配慮」とやらで削除されました。革命の歌を「国の歌」にするのは、なかなか大変なようですが、わがKIMIGAYOはお相撲さんの歌としても様にならないようですので、いく末はいかがなものでしょうか。梅雨時には、元気の出る「ラ・マルセイエーズ」がお薦めです。ぜひ一度お試しください。

☆まつもとしげる／(株)生活美学社／小田原市
Nifty;RXL12052
INET;fwgc9196 @ mb. infoweb.or.jp



明峰哲夫

“合法的”だが“不当”なもの

■森の中に埋もれるように・・・

僕の住む東京日野市に、住都公団多摩平団地がある。JR中央線「豊田」駅のすぐ前という至便の地だ。この団地は1950年代半ばに建てられ、住都公団（当時は住宅公団）の初期の作品らしく、約30Haの敷地にアパート、テラスハウスなど約250棟の低層住宅がゆったりと建ち並んでいる。敷地内に植えられたケヤキの樹は今ほうっ蒼と茂り、団地全体をすっぽりと覆い尽くしている。この森は、僕の住むまちの貴重な財産の一つだ。

ところがこの団地に、建て替え計画が進んでいる。住都公団は昭和30年代につくられた全国213団地の建て替え作業を進めていて、多摩平団地もその対象の一つとなっているからだ。

公団の計画によると、現在の建ぺい率50%、容積率100%をそれぞれ60%、200%に変更し、14階建てを含めた中高層住宅を建設し、2000戸増を目指している。既に市との調整作業に入っていて、まもなく建て替え指定が出される段階を迎えようとしている。建て替え後の家賃の値上げなどを懸念した団地自治会は、この間公団や市と交渉に当たってきたが、どうやらこのまま押し切られそうな雲行きである。

こうした中、僕たち市民と団地住民有志は、昨年春「多摩平の緑と団地建て替えを考える市民の会」を発足させた。団地自治会はどうしても、市や公団のスケジュールに合わせた実務的な対応を強いられる。団地建て替えを市民全体の問題として捉え、まちづくりの視点から広く市民の意見を集約し、提言することは彼らだけでは難しい。そこで僕たちの会の登場となった。僕たちは市や公団との交渉の場から一歩離れ、問題を整理し、提言する“シンクタンク”的役割を果たすことを目論んだ。この会に参加しているメンバーの多くは既に、「市民版・まちづくりマスタープラン」の策定（1995年春完成）や、「日野市環境基本条例」の直接請求（同年秋一部修正可決）などを通じて、提言づくりの経験を積み重ねていた。

この会が取り上げてきたテーマは、家賃問題にとどまらなかった。交通事情悪化、ゴミ増加など地域の人口増がもたらす諸問題、地元商店街の活性化、建物の耐久年限半ばでの建て替えの是非、建て替えによる緑や地下水脈の破壊、住宅高層化が及ぼす生活様式への影響、高齢者、障害者、母子家庭などへ対応する住宅のありかた、日本の住宅

政策など、様々な課題について検討を加えてきた。僕たちは公団の企てる「全面建て替え」計画は、公団の利潤追及の手段にしかすぎないことを確信しつつある。そしてその計画に対抗して、「リフォーム」計画の提案を考えている。この団地がつくられて40年近くを経た今、住民の生活のスタイルや家族のありかたは多様化した。それに対応して、住宅の配置の変更、老朽化した住宅の手当、間取りの変更やバリアフリー化など構造上の手直し、などが必要なのである。

それにしてもいったん公団が“決めて”しまった計画を覆すことは、至難の技であろうことは、僕たちにも想像できる。公団に限らず、この国では、行政や企業が、市民のあずかり知らぬところで様々な事業を決定する。市民には突然“お触れ”がやってくる。市民たちは提示された計画案に、ささやかながら“意見”を述べることができたとしても、計画そのものの是非については決定権を持たない。市民にとって、“計画はまずありき”なのだ。結局こうしてほとんどの事業は“計画通り”進行していく。市民たちの多くの不満と不信を残して。事業は“合法的”に決められ、“合法的”に遂行されているのであろう。けれども、市民の感覚からすれば“不当”な事業があまりに多い。“合法的”だが“不当”なものを、文字通り“非合法”なものとして成立させないためには、現在の開発にまつわる様々な法律や制度を大幅に変更する必要がある。何よりも事業の計画を立案するその場に、市民が“参加”できる仕組みが必要だ。その一例として、「環境アセスメント制度」を考えてみたい。

■環境を評価する

環境アセスメント（影響評価）制度は開発、つまりなんらかの形でまちの現状に変更を与えようとする行為が想定された場合、不可欠な手法だ。この制度は、事業が行われることにより環境にどのような影響を与えるのか事前に調査するものである。

ところが日本という国では、この制度はたいへん不十分である。国レベルの制度として確立されていず、東京都を含めたいくつかの自治体で条例化されているにすぎない。その「都条例（東京都環境影響評価条例・1980年）」も限界がある。ここでは二つの点を指摘しておこう。

一つは、対象事業が限定されている、ということだ。「都条例」によれば、例えば土地区画整理事業の場合40ha以上、市街地再開発の場合20ha以上の事業が環境影響評価の対象になる。それ以下の開発行為は対象にならず、“ミニ開発”は野放しに

なる。理想的に言えば、規模の大小にかかわらず、すべての開発行為にこの制度は適用されるべきではないだろうか。先に述べた「日野市環境基本条例」は96年4月発効した。この条例は、市独自の「環境アセスメント制度」制定を義務付けている。僕たちはまもなくできるであろうこの制度に、「都条例」の不備を補う役割を大いに期待したい。ただこの条例も、対象として「市の行う事業」という限定があり、民間による開発行為はチェックされない。僕たちが今直面する公団による建て替え事業は、対象にならないのである。

二つ目は、対象となる「環境要素」が限定されている、ということである。「都条例」によると、「文化財」を例外として、「大気」「水質」「土壌」「地形」「動植物」など「自然」環境だけが影響評価の対象になっている。

開発は「自然」環境だけではなく、地域の人口、交通、産業、コミュニティなど、「社会的・経済的」環境にも少なからぬ影響を及ぼす。これらの環境要素についても十分な影響評価を行うべきではないのか。

以上の現状を踏まえて、僕は環境影響評価制度について次のような提案を持っている。

この制度には、以下の三つの「評価」が必要ではないか。

(1) 開発前の現状評価・将来予測

今どうなのか、という調査と評価、及びこのままにしておいたら（つまり開発を行わなければ）将来どのようになるか、という予測。

(2) 開発をする場合の利益とコストの事前評価

(3) 開発後の評価

開発した結果どうなったかの調査と評価。事前の評価が当たっていたか、当たっていなかったかの検証。

現在の制度で行われる評価は(2)だけである。そこで環境影響評価を行う場合、開発はとにかく行うものとして、既定の事実となってしまう。(1)の評価を行えば、結果として“開発をしないこと”も担保されるだろう。また(2)を行うことにより、事前評価の“当たり”“外れ”が検証され、将来の同種の開発に対して貴重なデータを提供できる。また、“外れた”場合は開発前の状態に戻す、という新しいルール確立も可能になるかもしれない。特に(1)(3)の評価については、徹底した住民参加の下で行われなければ意味がない。街の“値打ち”は、そこに住んでいる人でなければ分からないことが多いからだ。

ところで、環境アセスメント制度を検討してきた政府の「環境影響評価制度総合研究会」は、行政指導で行われてきた現行制度を改め、法制化を打

ち出す報告書をまとめたという。この報告書では、現行制度は事業の概略が決まった後アセスメントが行われるため、環境への悪影響が判明しても事業内容の変更が難しいという問題点を挙げ、計画の早期の段階での実施を求めている。さらにアセスメントの実施後も、予期できなかった影響をチェックし、必要に応じた対策がとれるよう、事後調査の必要性も提言している（毎日新聞96年6月4日付朝刊）。

この記事を読む限り、この提言でいう環境影響評価制度は、(1)を含んでいないようだし、評価すべき対象事業や環境要素がどれだけ拡大されているか、あるいは評価への住民参加がどの程度考えられているかはよく分からない。政府は次期通常国会に法案を提出するという。

僕たちの会の「中間報告書」はまもなくできあがる。この報告書は現在の多摩平団地が持っている“価値”と、それを将来に向け維持・発展させるための手だてが表現されるはずだ。この「市民案」と公団の「計画案」のどちらが正当で魅力的かが、多くの人々によって検討されることを願っている。

◎「報告書」の入手を希望される方は、以下までご連絡下さい。

「多摩平の緑と団地建て替えを考える市民の会」事務局

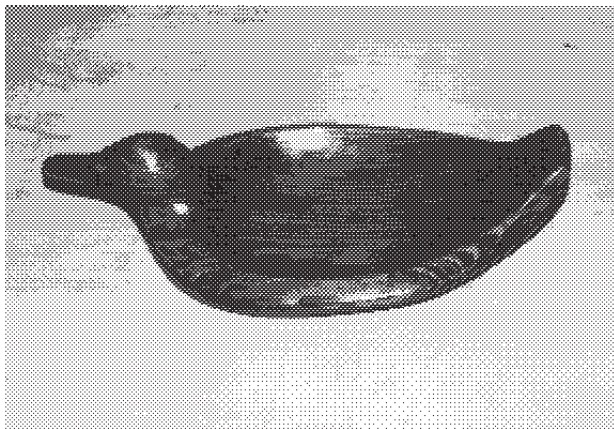
〒191 東京都日野市日野台1-19-1-801

金井透気付 ☎0425-83-1618

☆あけみねてつお

農業生物学研究室・やば耕作団／東京都日野市





日本の外れ網走に「うるし」の林があることをご存じの方は少ないでしょう。昔、日本では「うるし」は茶、こうぞなどと並ぶ年貢の重要品目でした。それが網走になぜ？その謎に包まれた由来の説明は別の機会にして…。

4年ほど前、網走に”うるしの会”というのができて、その「うるし」を生かせないかという話が当森の家にも

ちこまれました。折から私の頭のなかにはカラマツでいっぱいでしたから、木の葉や木の実、おぼけカボチャや鮭の皮、の土器や貝殻や割りばしなど、片っ端からうるしを塗ってみる一方でカラマツとうるしの組み合わせを考えてみました。とりあえずチェーンソーとディスクサンダーでできるものから取りかかりました。ノミや彫刻刀は年輪の粗密が激しく私には手に負えません。丸いものは設計図を描いて置戸の知人にロクロで挽いてもらいました。うるし塗りは「ふきうるし」という最も原始的かつ単純な方法で6回拭いて仕上げました。作って3年、陽の入る窓際に並べ、時々

使用したりして観察していますが、当初懸念された、ひび、ねじれ、やになどの変化はなく、むしろうるしの透明さが増し、木目や下地に描いたウイльта模様などが鮮明に浮き上がってきています。

■カラマツのうるし器の特長

- 大ききの割合に軽いので大きな器ができる。
- 身近に大量にあり、安価もしくはただで手に入る。カラマツの伐採現場に行くと根元辺りの太くて曲がった部分が捨てられており、もらってこれる。
- 年輪の中が大きく粗密（春材、秋材）が極端なので派手な木目が現われる。またワイヤーブラシなどでこすると木目の凹凸が出せる。サンドブラストならいっそう強く出る。
- 節や、やにぶくろ、虫くい穴などを生かす風と素朴な、カントリーな感じになる。

興味のある方は作ってみてはいかがでしょうかでしょう。

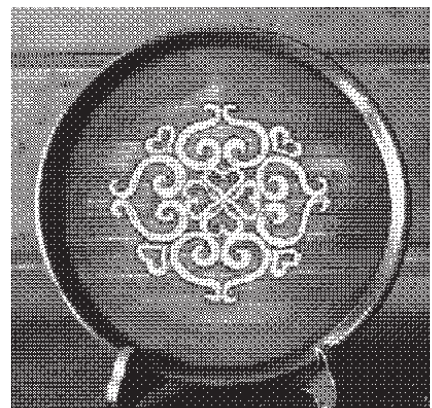
※現在、網走のうるし林は個人の所有地にあり、実験用以外は中国産のうるしを使用しています。うるしの会では800本程を植栽しており、数年後には自前の網走うるしが実現するでしょう。



今回は「森のオブジェ」をご紹介します。

☆しみずあつし / 呼人・森の家 / 網走

上写真 / カラマツうるし 水鳥果物鉢
 中写真 / もりの家カラマツうるし試作品



右写真 / ウイльта文様 トドマツ盆

美術家の友人がある時こんなことを言いました。「木工をやっている人は、どうも素材に頼りすぎる傾向にある」と。たしかにそうかもしれないといつも思います。土や鉄、あるいはガラスなどを素材として仕事をしている方々と、私のように木を相手にしている者とは素材に対する意識が少し違うかもしれません。

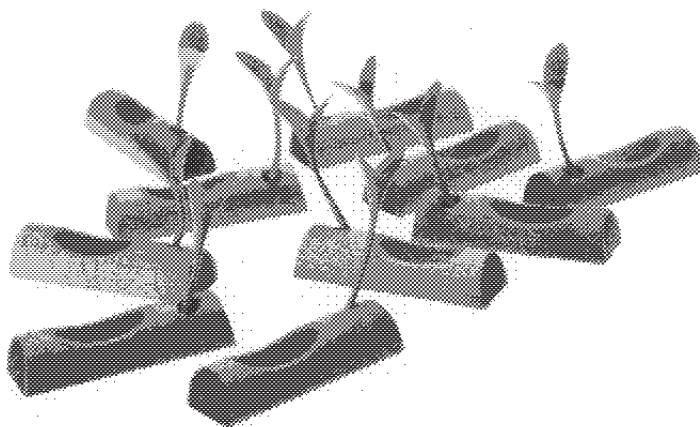
私はどうしても手元にある乾燥した板から、その材料がまだ樹木として地中に根をはり、生きて年々成長していた姿を思い浮かべてしまいます。カリン材やローズウッド材などの南洋材は実際に立ち木を見たことはありませんが、きっと熱帯

のジャングルの中でさまざまな他の生物たちと一緒に数十年・数百年かかって成長してきたのでしょう。私の手元にこの材があるということは間違いなくそのなかの一本が伐り倒されたことを意味しますから、つい感情移入してしまうのは仕方ないことなのかもしれません。

三年前に道立旭川美術館で開催された遊びの木箱展に「ひこばえ」という作品を出品しました。工

房の隅に転がっている切端を無駄にしたくないという思いで、二つに切って内部に蝶番をつけ木の芽のような鍵をつけました。芽を持ち上げるとロックがはずれ蓋がスライドして開くという仕組みです。ひこばえとは木の切り株や倒木に生えてくる新芽のことです。この「芽」を削り出す仕事が好き、

またなにか別の作品を作りたいと思っていました。一昨年の秋に大阪のギャラリーで“HASHIOKI展”という展覧会があり、こんな箸置きを作って見ました。祝いの膳などによく似合いそうな「めでたい箸置き」ができました。



■ひこばえ箸置き

■サイズ 60×18×高さ13(50)mm：1996～

■木の芽の部分 イタヤカエデ、
箸置き部分 イタヤカエデ ローズ カリン他

■¥4,500

クラフト&デザイン タンノ
〒079 旭川市永山9条3丁目1-19
Tel,Fax；0166-47-3895

光と闇・織りなす色◆ルドルフ・シュタイナー色彩療法の体験◆吉澤明子水彩画を中心に

7/31(水)～8/4(日)9:00～19:00(最終日～17:00)＜札幌資料館ミニギャラリー＞

札幌市中央区大通り西13丁目 TEL.011-251-0731 問い合わせ：三浦佳津子 TEL.0166-85-4024

水彩画講座 7/30(火)、31(水)＜札幌市教育文化会館＞、8/8(木)手稲(詳細未定)、8/9(金)
＜札幌かでの2・7＞、連絡先：岡田美佐子 TEL.011-375-4537

「ロバの学校」8/9～12 美麻遊学会(長野) ¥38,000(交通費別)、対象：小学生以上

星空のコンサート・サウンドハンティング・音の工作・ルネサンスダンス・ガランピー祭ほか
ロバハウス 〒190 東京都立川市幸町6-22-32 PHONE 0425-36-7266 / FAX 0425-36-7968

InternetにHomepage開設のお知らせ＝岡田光司

Homepage of Wood Studio 童Do / <http://www.adnet.or.jp/ws-do/index.htm>

僕たちは（たぶん、そうくくってしまっても許されると思う。それが直感）いろんな事をいつも思っている。

子どもの頃、まだ当時は砂利道がそこいらじゅうに広がっていた、ぼくはその砂利を眺めながら歩くのが好きだった。好きだと言うには少し無理があるかな。わざわざそうした道を選んで遠回りをするということはないから。でも、足の裏を刺激する感触と、「ガシャガシャ」耳につたわる音。砂利を撒いてから半年か一年もすると、ほとんど土の中に埋もれてしまって所々に石ころが顔を出しているようになるけれど、それでも仲間外れというか、土になれなかったやつが所々に転がっている。それをけっ飛ばしてどこに飛んでゆくか、を観察することがおもしろかった。いや、それ以上にその砂利たちはぼくの想像力をかき立て、空想の不思議さへ思いを繋げずに入られなかった。

足に当たった石を拾ってまじまじと見つめれば、なにか不思議な模様がついていたり、緑色の斑点が幻想を誘う。いったいこの石はどこから来たんだろうか、どこの川からさらわれて来たのやら、石になる前はなにをしていたのかなと思えば、砂利道は無限の思索の道としてぼくを導く。

そのちっぽけな運命論はやがて唯物的な視線へとぼくにしてみれば当然の変化をした。

ぼくにとっての砂利道は線路の砂利が取って替わり、学校の行き帰りの車窓の眺めと、空想の触媒になった。線路の下を延々、累々と積み重なる砂利が巨大な重量を支えながらひしめいている。

その日、線路の脇にはたんぽぽの花が咲いて電車の通過する風に揺れていた。線路と砂利とたんぽぽに日の光。それらはぼくの目に一瞬の間に飛び込み、飛び去ってしまったが、ぼくの記憶には永遠にも匹敵するくらいの強さで刻み込まれた。

上から落ちてくる鉄の粉のせいで赤茶色に錆びた石。その石の下の石は白いままだ。電車が通過するたびに、重量に答えて一、二センチ沈む線路の下で隙間になっている。

たんぽぽはかつて種であった時分に風に乗ってここまでやってきたのだろうか。でも「そこ」がどういうところだとか、選んできたわけでももちろんない。線路との隙間も、種の場所も意志の表示ではない。まして太陽の光線が何光年の彼方から

到達するその終点に何が待ち受けているかなど想像のしようもない。

でも、それはそこにある。そしてそれを感じる自分がある。

線路の石に降り注ぐ光線。たんぽぽを暖める光線。ぼくにそれらを光景として見せる光線。

家のすぐそばに川があった。仲の良い友達の家にはモーターボートもあった。二人でよく乗った。まっ平らな川の上を滑るボートの舳先。その先っぽにまたがって足先を水に着けると、水が二つに分かれて水面をかき乱す。

一センチほど前の水には空の雲が写っているけれど、ぼくの足に触れたとたんにはそれは空中に小さく跳ね上げられて、小さな水玉になって小さく飛び散る。なんという理不尽なことだ。水はつながっているのにぼくの足やボートの舳先にぶつかった水はすべて飛沫をあげるその材料になるのだ。

ぼくには不思議でたまらなかった。

静水と飛沫。

線路と石。

たんぽぽに光線。

そういう存在としてそこにあったことが運命だと思っただけではない。

砂利を照らす光線、たんぽぽの光線、静水と水しぶき。それらは意志のもとで形成されているのではなく、必然なのだ。そこにあるからそうなるという必然が強烈に存在するのだ。そこにあるからある。そこにあるから見える。それだからぼくの足を知覚させる。

そこにあるという事の、そのありようが不思議に感じられて仕方がなかったのだ。

ほとんどの道路が砂利道であった頃、ぼくにはそれこそ砂利の数ほども思うことはあった。そしてそれは直感として想像を飛躍させ、自由に取り留めなく変化してゆく。もちろんそこには何の脈絡もないし、系統的な思索になるわけでもない。ただひたすらに思うだけのことである。

思うとはなんと不思議なことだろう。

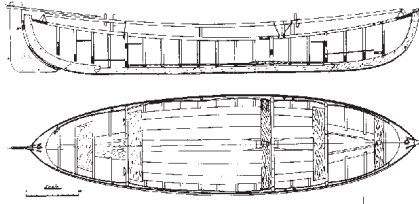
足や目で知覚したことが想像を刺激して翼のように拡がるから。

そしてぼくはその思いを直感として全体像の中に組み込んできたように思う。そして時々思いは検証しなくてはならない立場に追い込まれるから、否応なく考えさせられる。具体的な現実の場面が直感の実験場というわけだ。その結果がどうだなんて聞かないでくれ。

想像が自由に拡がり直感が思いを巡らせる。検証

は見事にアサッテの方を向いても、ぼくはそれを受け入れるしかない。え？とんでもない居直りだって。それも認めるしかない。ぼくの体の範囲を超えて想像を広げることはできないからだ。直感が飛躍し、現実の具体で縁取りをする。僕たちは（たぶん、そうくくってしまっても許されると思う）いろんな事をいつも思っている。

☆すがぬまろく TONCACCI ATELIER / 茅ヶ崎市



三上敏視

老いるはオイルで

去年から腕に傷が盛り上がったような跡がいくつかあった。草などでこすって出来たすり傷がミミズばれのように腫れ、赤味はないもののレリーフのようになっていたのだ。これはもう我が身の老化が表面化してDNAの傷を修復できず、細胞が元に戻れなくなっているのだな、と思って半ば諦めかけていたのだが、春頃になってどうも気になってきた。腕をさするとスベスベでないのだ。色のない入墨のようで、この手触りを喜んでくれる女性もいるかもしれないが自分ではあまり気持ち良くない。なんとかしようかというところで思いだしたのがコパイバオイルというシロモノ。これは2年前くらいに細野師匠が「いいパワーのものがあると教えてくれたもので、南米に生えているコパイバという木から抽出したオイルである。「神の薬」とか「奇跡のオイル」などといったもので現地では大切にされているものらしい。今はインディオの生活を壊さずに収入の道を、という感じで作っているようでニューエイジショップなどに置いてあるものだ。以前紹介した波動水のDr. ロレンツェンC-400というやつも同じような南米の木の樹液の波動を転写した水で、免疫力が劇的に上がるというものだが、このコパイバオイルも傷を治したり、病気を治したり、万能薬という触れ込みである。師匠からは「コーヒーにちょっとたらすといいよ」といわれ、試してみた。確かにパワーがあったが香りがきつくてコーヒーの味が変わってしまう。風呂に入れば良いとも説明書にあったが、このオイル、5ccくらいの小さな瓶入りで2800円なので普段使いにはちよっ

とお高いです。わが家では同じくパワーたっぷりの韓国の竹塩と共に旅行の時の備品にしている。(40過ぎて水ぼうそうにかかり、しかもそれがオーストラリアへ行く直前だったと言う去年の1月は、成田のホテルで波動水を飲みながらコパイババスで半身浴して蝋燭立ててマントラをとるという総動員で免疫を上げ、医者にもかからず真夏のオーストラリアへ行ってきた。ほうそうにはもちろんオイルを塗って。)

で、前置きが長くなったがその腕の傷の部分にコパイバオイルを塗り始めたのだが、2、3日で傷が赤くなってくるではありませんか、お立ちあい。治癒が始まったなどと思って喜んで続けていると盛り上がり小さくなってきた。せっかちな性分なので「こうなったらひっかいてかさぶた作った方がはやいかもしれん」などと血を出しつつもいろいろ試して楽しんで、なんと一ヶ月後には傷は消えてしまった。

あらためてコパイバオイルのパワーに感心している今日この頃。こうなったら顔のシミも取ってもらおうかと、多くの女性のためにいま再び使用再開。結果は次号を待て。

前々号でお知らせした私のCD『気舞』ですが、おかげさまで主に手売りで通信販売で評判も売行きもますます。家は建ちませんが郵便受けくらいは作れそうです。でもまだまだ在庫有り。注文待ってます。

7月13日はUFOの町と名乗っている石川県の羽咋市にあるUFO資料館、コスモイル羽咋のオープニングイベントで「細野晴臣環日本海モンゴロイドコンサート」というのがあり、ディジェリドゥーを吹きに行きます。CDも持って行くのでお近くの方はぜひどうぞ。(いないか)

7月20日の海の日には札幌の「VOODOO DANCE」という店で「HAWAIIAN NIGHT」というやつをやります。普段はアフリカの音楽がかかる店だけど、この日は私がハワイの音楽を、古いやつから最新ポップスまでいろいろかけるという趣向。トロピカルカクテルやハワイアンフード、フルーツなんかも用意して、店内アロマもレイの香りいっぱいなんだから。マカデミアナッツもあり。あとはビキニのお嬢さんだけ。

コパイバオイルの入手先：「ナワ・プラサード」

TEL.03-3332-1187

☆みかみとしみ/MICABOX/札幌

「技術の黙示録」

講師／飯島孝氏（岐阜経済大学教授）

1995年5月15日（水）夜、ワールドレストランにて

参加者／約25人

「中国じゃね、研究会ったって『煙酒（インゴウ）』って言うそうですよ。」と事前の打ち合わせの電話で言われたとおりのビール飲みながらの愉快的な会。飯島さんの近代技術史横断にすっかりぶらさがってしまった！

～今日の暮らしを作った昭和の技術の歴史とは何だったのか？それは現象的には自動車の開発であり、台所すなわちサシスセソ（サ＝裁縫／シ＝躰／ス＝炊事・炊飯／セ＝洗濯／ソ＝掃除）の機械化であったと大きくくくることができるのではないか。そうして追求された、大量に作り大量に使う牛飲馬食のモノの世界に、豊かな地平は結果的に開けず、副産物としての種々の問題を前に急速にアウラは失われ、技術はいま暮れるのか、それともさらに明日を生成することができるのか…。さ、あなたならドウスルノダ、と飯島さんは言う。

■飯島孝著“技術が求める美”化学工学・第57巻・第7号より

「詩人ヴァレリーは、レオナルドの手記の冒頭の一節『わがりオナルド／おお／かくも苦心のリオナルド・・・』をとりあげ、苦しみ、励むレオナルドに自己を仮託し、石や木の動きの物象を心象としてうけとめて造形する営みを『およそ心象（イメージ）こそおそらくはそのわれわれ自身の元祖（はじめ）にほかならないのかもしれない』（レオナルド・ダ・ヴィンチの方法）と述べる。ヴァレリーは、心象が芸術と科学・技術に重なり、つながるとみた。そして人間復興をめざしたルネサンス期のひと、レオナルドにおいて、この人間の多面性を讀もうとした。

人間の未来に希望を託すには、人間の営みを全体としてとらえ直し、技術に失われた人間らしさを取り戻すことにほかならない。

専門性と特殊性が社会的に優位とされ、技術のほかに関心がないのを誇りとする文化・社会を批判し、全体的人間、多技術に未来を展望するマンフォードに、私の論述を重ねて心を寄せたい。

レオナルドが芸術家であり、技術者でありえたのは、あまりにも機械の目と手に頼りすぎる現代のわれわれに対比して、本来の職人の目と手を持つ

ていたことを、あらためて心にとめたい。技術の地平にみる美は、全体的人間の心象にときめき、映る世界であろう。」

（文責／永田）



永田まさゆき

ぼ、ぼくらはトンネル山開拓団 ...

残雪を踏みわけ、隣の清水家の小型重機を Mr. 田村に運転してもらい ... ということで5月の連休にスタート。元は畑らしき斜面も、数十年後の今となっては灌木やクマザサそして石ころだらけのサバイバル。重機で表土をひっくり返し、石と木やササなどの根を皆で拾う。拾っても、拾っても ...、石については寒冷地においては地中から湧いてくるのだという珍説も出る。しばしかかり3aほどの畑らしき部分を確保。葉物、根菜類、ちょっと蕎麦、大麦（麦酒用）などなど植える。6月末現在、悪天候（寒い）にもかかわらず数日分の野菜（今のところ間引き中心）をウツヒツヒと持ち帰ることができる。何とんでも“ひらひら”に集まる若者パワー（！？）が牽引力。週2回、3～4人から6～7人位づつ汗をながしているところ。今は皆ニョキッとモノが生えてくる地面にだけ眼が集中してるかのよう。タテマエをあまり決めてない。少しづつ道ができていくという実感。

カミナガさーん、どーですかあ？

人も歩けば羊に当たる

間引き・苗植え・水やりは、その日の畑仕事として頭の中にありました。テーブルに広げたお昼ごはんのバラエティーぶりも、そのあとの山菜取りも、予想し計画していたことだったのです。が、羊の毛刈だけはまさかこの日、自分がやることになるとは思っていませんでした。

5月の初めころ永田さんのところで生まれた三匹の山羊の赤ちゃんが、すっかり大きく元気になり、温子さんによると「二、三日前から急に親離れして」、小屋から出すとグングン走り回るようになっていました。その勢いたるや、見ていて気持ち良いぐらいですがその一方で心配なのは畑荒し。案の定、私たちが畑で芽の伸びぐあいなどを見ていると、ピョンピョン飛び跳ねるようにして入り込んできます。けれどかわいいので邪険にもできず、抱き上げて畑の外に出してやります。山羊は人間より体温が高いようで、抱いた瞬間「あったかいなあ」と感じるほど。いかにもまだ赤ちゃんの子山羊を、誰も怖いとは思いません。が、これが羊となると、おとなしい動物だとわかっていながら体が大きいので近づきがたく、今まで一度も触ったことはなかったのです。

その日の昼さがり、私たちがフキやクルマバソウを採りおえて、もうそろそろ帰ろう丘をくだって行ったとき、ちょうど羊小屋から一頭羊が引っぱり出されるころでした。さあこれからひと仕事という雰囲気のある人が二、三人。小屋の近くにはブルーシート。いったい何が始まるのでしょうか。まさか羊を食べちゃう... わけがないと思いましたが、気になったので見ていました。こうして予期せぬ出来事に出会ったのです。

舌切り雀のお話しに出てくるような大きなハサミをもった温子さんに加え、三人ほどの女の人の手で、羊の毛刈りが始まりました。刈っている間に動き出さないよう、羊を押さえている人手がもっとほしい様子なので、後生大事にかかえていたフキの袋をともかく置いてブルーシート組に加わった私です。さてそのあとはひたすら目の前のことに神経を集中させるだけ。「なぜここでこんなことしてるのかしら？」という考えがチラッと頭をかすめても、ぐずぐずしているヒマはありません。羊が起き上がろうとする瞬間、反射的に腕に力を込めて押さえ付け押さえ付け...。心の準備なし、練習（?そんなものがあればの話）なしで、ともかくやれたというのが驚きでした。

「一頭目は恐る恐る、二頭目には少し慣れ、三頭目

以上やればなんのことはなくなる」という話をそのとき聞かされ、その気になってハサミを持ち、少し毛を切ってみました。皮膚まで切ってしまうかと、そればかりが心配でした。植物相手の畑仕事とはまた一味違う生き物の暖かみと皮膚の下に流れる血を感じながらの毛刈りです。知らず知らずのうちに心身のテンションが高まっていました。

一頭終わったところで帰るつもりだったのが、その場のなりゆきで三頭目までおつきあい。クリクリになった羊を引っぱって小屋にいれ「終わった! 終わった!」と我に帰ると全身汗ビッシュヨリ。でも、普段なかなか体験できないことを味わえたという充実感がありました。いやおうもなく毛刈りの場にひきずり込まれていく私を見て、なぜか笑っていた畑の仲間も（なんてやつら!）、結局は羊の足を持ち頭を押さえていたのです。めったにできない経験を、とにかくその場で楽しむべし、と急速に考えを変えたのでしょうか。刈ったばかりのモワモワ状態の毛は「フリース」と呼ばれること。毛にたっぷりついている油はラノリンといって口紅の原料になること。羊の乳首が四〜五個あることも、今回の経験で知りました。

ほんの百年ちょっと前までの機械化以前、日本では木綿にしる絹にしる織物といえ、長い時間と手間ヒマかかる貴重品でした。古い布を細かく裂いて織る「裂き織り」という方法も残されています。現代になってからも、私が子どもだった1950年代から60年代初頭まで、母は家で着物の洗い張り・毛糸の編み直し・打ち直した綿で布団作りなどをしていたのを思い出します。こんな話になるなんて、なにか昭和の語りべめいてきましたね。色を付けてツヤを出し、人間の欲求に合わせてあれこれ手を加えてはいるけれど巷にあふれるファッションのかずかずも、もとはといえば材料は、自然からの恵みにほかなりません。初めての羊の毛を刈らせてもらったその夜、こんなことを考えさせられたのです。

☆かみながまりこ／喫茶・ひらひら／札幌



Ruffles on my Longjohns
Isabel Edwards, Hancock House Publishers, 1980

坂井正周

自由学園明日館にて

もうかれこれ半年程前の事であるが東京の池袋にあるかの” F.L.Wright” の設計による自由学園明日館を見てきた。

10 年程前から見学したいと思っていたが、当時東京に住んでいたせいか余りにも近すぎて何時でも行けると思ううち、とうとう行けずに札幌に移ってから飛行機代を払って行く羽目になってしまった。今迄に見たライトの建物は、アリゾナにある WEST TALIESIN と同じくアリゾナのフェニックスに数件現存する住宅や教会だけで、未だに帝国ホテルも落水荘もグゲンハイム美術館もお目にかかれないうち。

しかし私にとって” F.L.Wright” には色々な意味に於いてながしかの影響は受けていると感じているのは、多分” F.L.Wright” の建築との出会いとその時の自分自身との関連がある。建築学校で初めて見た落水荘のスケッチ、仕事をやめてアメリカを放浪していた時に TALIESIN で初めて 等身大の” F.L.Wright” に接し、建築のなんとやらが初めて体感を通じて入り込んできた頃、ともっともらしく書いてしまったが、とにかく誰がなんと言おうと私にとっての” F.L.Wright” はミ-

ハー的意味も含めて大好きな建築屋さんなのです。見てきた自由学園明日館は色々とお事情沢山ありの様で、隣接したお弟子さんの遠藤新さんの設計による増築棟は見事にレストア（ホシュウ、フクゲン、シンピンドウヨウ？）されているのに、師匠の建物はかろうじて形を保っている有様。（いたる所天井落盤の恐れ有注意の張紙）しかし当時のオリジナルという点ではこれはすごいオリジナルといえる。それは建てられてから今に至る時間の経過までもリアルに伝えてくれる程、生きている建物を感じた。生きているから歳もとる、当然の事だが考えてみると大抵の建物は本当に歳を得る前に殺（解体）されてしまうか、別人の如く改造（改築増築）されてしまうか、さらにとっても運の良い極々一部の建物だけが重要文化財の如く当時の姿に再現されるかであろう。

しかしいくら当時の姿を今に蘇らせてもそれは建



物としてただ存在するだけの、あまり近所の人達のお役には立っていないモノである事が多いと思うが、これでは本来の建築物ではなく建築仏になってしまう。しかし嬉しかったのは明日館が今もって生きている建築であったことで、実際に使われ、そして老人をいたわる様に実に大切に手入れされている事（ギョウシャのホシュウでなく）。見学してどこからともなく甘いケーキかクッキーの焼ける匂いがしてきたり、使用中のため見学できない部屋があったりと、生きている建物の空気をとていい感じで味わうことができた。古いが良く手入れされた誰かの住宅におじゃましてお茶菓子をご馳走されながら穏やかに流れる時間のなか

にいる様なそんな感じだったと思う。庭を手入れしていた管理人のおじいさんからこの建物の事についてとても愛情のある気持ちのいい説明を受けたとき、私はふとラピュタの事を思い出してしまった。天空に浮かぶ城ラピュタの主がいなくなって目的もなく天を彷徨う中で、かつての主の使いがたった一人で廃墟になりつつある城の中で手入れをしているシーンを。きっと物語もこの明日館もその辺りのときが一番良い時なのではないかと、使い込まれたすべてが長い時間を得て周囲の空気と一体になり建物が自然の一部になる頃から大切に労る様に住人と生活を共にするタテモノ。明日館の見学は無料です、もし時間

がよろしければ上京の折りにでも寄って見ては如何でしょうか。

住所：東京都豊島区西池袋 2 丁目 31-3（JR 池袋駅より徒歩 10 分程）

★アリゾナフェニックスの在住の知人より” F.L.Wright WEST TALIESIN” のコーヒーマグカップとマウスパッドを送ってもらいましたが両アイテムとも” F.L.Wright” のデザイン画が描かれていてなかなかのものでした。もし入手希望される方などおりましたらお取り寄せできますので事務所まで連絡下さい。

価格はどれも送料込みで

コーヒーマグカップ（¥3000）/マウスパッド（¥3500）位になると思います。（レート変動有）

☆さかいまさちか／お茶の水設計工房
（TEL&FAX 011-511-0213）／札幌

ひつじ倶楽部

炭と羊と麦酒の集い

1. 炭焼き教室 (伏せ焼)

日時 8月10日(土) 10:00～

木材セット、点火、煙調節等までは14:00くらいまでの予定(ここまでの参加でもOK)。

以降火の調子を見ながらの講師による「炭及び炭焼きの効用」についての講座があります。火は夜半には落し翌朝完成の予定。希望の方は持ち帰ることができます。

会場 永田宅の山(札幌市西区小別沢トンネル)

講師 杉浦銀治氏(もと農水省林業試験場木材炭化研究室長、炭やきの会副会長、主な著書～「日曜炭やき師入門;総合科学出版・1980」「炭焼革命、まちづくりと地球環境浄化のために;牧野出版・1992」「木酢液の不思議;全国林業改良普及協会・1996」)

参加費 ¥1,000

他飲み物、食事等各自持参(昼のお弁当は予約できます・¥600程度)

キャンプ可

主催 ひつじ倶楽部

※用意を7月初旬より始めます。まず樹木の間伐から。<すみっこ倶楽部>メンバー募集中。

2. 羊と手づくり麦酒の集い

茶路綿羊牧場の羊丸焼きと北海道麦酒党のメンバーの手造り麦酒の試飲会

日時 8月11日(日) 11:00～14:00

前日の炭やきがうまくいけば丸焼きに使用

会場 永田宅の山

参加費 ¥2,700 + 飲み物など1品持ち寄り

主催 ひつじ倶楽部+北海道麦酒党

※1 & 2 共通のお知らせ

○雨天でも行います。

○ついででの物売り・芸能などはあらかじめ問い合わせてください。

○7/30までに予約してください。

問い合わせ・予約先

ひつじ倶楽部 ☎ 011-611-2739・井田

アトリエオン ☎ 011-664-5148・永田

永田史明

木立、せせらぎ、鳥のうた、そして珈琲

スペース「風小僧」始めました

「工房だより」の読者で、木造中心の建築設計をやっています。昨年函館のとなり七飯町のはずれの仁山のふもとの、木立とせせらぎにめぐまれた場所に住まいを建てました。牛舎(BARN)のような外観です。1階にはアトリエと併設して、18坪くらいのスペース「風小僧」という喫茶店のような、居間のような、寺院のような、ギャラリーのような、牛小屋のような空間の店を設けました。

喫茶店のようなものですが、メニューは珈琲とジュースしかありません。しかし、ゆったりとしたこの時間と空間があるので、本当はこの場所を解放するというで料金をいただきましたが、それではちょっとということで、飲みものを出して500円いただくというシステムでやることにしました。

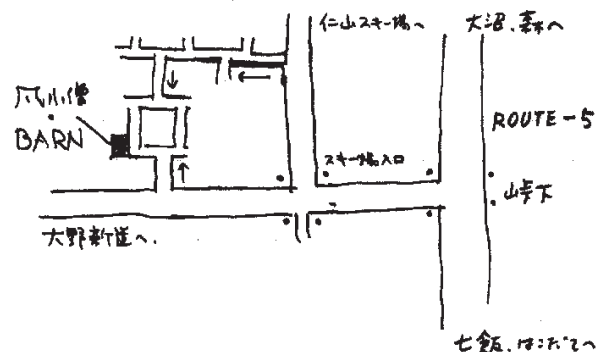
函館から車で30分ほどでこれますし、野鳥なんかもけっこう来ます。先日は美しいカワセミもやって来ました。そんなのを見ながら、静かに会話をしたりのんびりしていただくスペースにしたいと思っていますが、これによって人に来ていただき、何かを感じてもらえたり、私の仕事や考えなども少しでも知っていただければと思います。

ここに合う、小さな展示や会合、コンサートなどにも使ってもらえれば嬉しいと思います。一度いらしてみてください。同じ指向性の人々と知り合えれば最高ですが。営業はPM12:30～5:30で6:30～8:30は予約にてスペースをお貸しするものですが、臨機応変にやらしてもらおうと思っています。場所は仁山スキー場入り口より一本先を入ったところで、峠下より車で1分程です。よろしく御願います。

☆ながたふみあき / 建築アトリエ BARN

北海道亀田郡七飯町仁山 473-62

TEL 0138-64-3183





■ バイバイ・新聞

前号の片桐氏に続け！というわけで、「新聞なんか取らないもんねー」にぼくも乗ってみようかな。毎朝起きぬけのミルクティーのつまみの新聞タイムは、無いと困る程でもないはずなのに、食事のように習慣化しています。以前、スイス人の客が朝夕の分厚い新聞とつきあう私たちを珍しそうに見ていたのを思い出しました。新聞とご縁がなくなっただけで今どき餓死しない。どっかで巨大なメディアの作用を大きく受けながらやって行かざるを得ない毎日であることははっきりしています。むしろそれがなければ困るかのよう染されてる僕のアタマをカラカラと振る時がきたようです。たまのカップラーメンがしみじみおいしいように、欲しくなった時に買うという付き合いに変えればいいのです。

例えば6月28日の朝日の朝刊（札幌版）の中で、僕がほとんど見なかったのは全32ページの容量の中の実に半分弱～約15ページ分を占める広告（この日はそうでもなかったけれど、中でも多いのは自動車の広告で、4ページ分位の日をよくあります。いかに世の中がクルマに依存しているか！）。あと見ないのがテレビ・ラジオの番組欄、スポーツ欄、商況（株）、おくやみ・釣りなどで合計約6ページ。さて、残り11ページが社会・経済などのスペースですが、これも全部読まないうちに夕刊を含め大量のチラシと共にうず高く積み上げられる結果になるわけです。ついでに朝日ということでは、先月から刊行を始めた月刊のクルマ雑誌ですが、なんじゃこのタワケモノ...であります。

このごろの新聞は面白くないと思います。本質的なその役割を否定したくはないけれど、きっと別なメディアに席をゆずる時がきているのだろうという実感があります。銀行にお金を預けておけば安心ということが、どうも幻想らしいというのと同じように、情報はビニルハウスの散水のごとく上から下へ自動的に降ってくるようなものでなく、その流通の全ては、選択的に受け取り評価し合うようなシステム・メカニズムへ移行していくべきなのだと思います。

■ バイバイ・オリジナリティ

たとえば特定の個人が努力して開拓した技能や能力や発見など（乱暴にも十羽ひとからげにそれを“情報”ということにして）が、他との差異として値うちを持ち、一儲けできる時代は過去のものになりつつあるのかもしれませんが、いや、それらを囲い

込んだあげく、といったほうが正確か。とんがってるのにヒトをもの欲しそうにさせる「オリジナリティのようなもの」がぎくしゃくとせめぎあう社会よりも、それらをオープン化し、その時代その地域の共通の道具として、多くの人々の手にあつけらかんとゆだねたほうが、はるかに気持ちがいい「関係」が生まれそうです。

明るい陽の下で手を取りダンスをするオメデタさを忘れまい。暗闇の中での遠吠えも大事ではあるけれど。

■ バイバイ・ホワイトドーム

札幌の南側に豊かに広がる「羊ヶ丘」と呼ばれる緑地帯＝国の農業試験場が閉鎖される予定で、跡地に巨大なスポーツ施設＝ホワイトドームを建設するという計画が進行中です。サッカーのワールドカップ開催が韓国と協力してということになって、イマイチ行方が不透明ですが、この計画に異議ありという声はほとんど聞かれませんが（市議会で規模縮小の意見が出たものの）。僕はサッカーにもコンサドーレにも興味がないので（好きな人がいるということは尊重する）偏見があるかも知れないが、もっと別な目的に試験場跡地を利用した方が、長い目で見て得策と考えます。現在の緑地としての試験場の一角が、大都市・札幌の自然環境に大きく寄与していることは疑問の余地がないでしょう。ただでさえ少ない札幌市内の緑環境は、拡大せねばならないということはあっても削るといことはもうすべきでない。もうディズニーランドはいらない。いつまでバブルのお化けとつきあうんだい？

跡地がその緑密度を増殖させながら、都市機能と入れ子になる形で、大きな市民農園として再生していく...という夢を僕は持ちます。これを対案に育てるってって蟻の反抗みたいなものかも知れないが...、誰かいっしょにやりますか？

「羊ヶ丘」なのです。今遠く追い払われた羊たちは、観光のためでなく、市民の暮らしに必要な隣人として、そのとき帰って来るのです。豊平川河川敷の林をはじめ他の緑地へ通じる「羊のみち」が整備されます。また地下鉄は通勤ばかりではなくて、ちょっとした農機具や自転車あるいは小動物などと共に利用する人のための車両が設けられ、今どきの晴れた週末には「羊ヶ丘駅」はちょっとしたラッシュに...。

■ 去年全滅のさくらんぼが今たわわに。でも季節の推移はヘンだ。お元気で夏を。今度は9月に！